

楽  
曲  
紹  
介

解説=堀 朋平

11/12

ロ  
ッ  
シー  
ニ  
の  
時  
代

19世紀最初の20年は、なんとといってもロッシーニの時代である。市民が力をつけるに伴って、貴族的で壮大なオペラ・セリアはみるみる時代遅れになった。これを座して見守る同時代人を尻目に、ジョアキーノ・ロッシーニ(1792-1868)は、オペラ・ブッフアの活力をセリアに注入し、ヴェルデイに続く道のみごと準備したのだった。彼は1815年頃にはイタリア全土を席卷し、32歳にして最終地パリに破格の待遇で迎えられ、5年後には引退。生涯のオペラは39作を数える。

その人気は国境を越えてウィーンでも爆発した。ケルトナートーア劇場で1816年から相次いで上演されたロッシーニ作品は、ベートーヴェンをも凌ぐ勢い。まめに劇場へ足を運んだ25歳のシューベルトは特に『オテッロ』に感激し、「彼には尋常でない天才がそなわっていると言えるかもしれません」と、微妙なニュアンスで愛憎なかばの感想を綴っている。吹き荒れるロッシーニ旋風は、シューベルト渾身のオペラをお蔵入りにしたばかりか、ドイツ・オペラ史にも長い停滞期をもたらしたのだった。

序  
曲  
、  
さ  
あ  
召  
し  
上  
が  
れ!

オペラだけではない。人々を魅了したのはむしろロッシーニの器楽的な側面だった。台詞を呑み込まんほどの「純粹旋律」(ヘーゲル)と称えられた完璧なメロディ、そのエッセンスが「序曲」である。ただし、『ギョーム・テル』(ウィリアム・テル)などを例外として、この作曲家は劇内容を序曲に映すことをせず、別作品の転用もよく行った。序曲そのものの味わいを重視した、とも言えよう。

ところで、ふくよかな作曲家はグルメにも天才を示した。下宿先であるボローニャの肉屋で「将来は豚肉屋になる」決意を固めた幼少時の逸話をはじめ、少なからぬレシピにその名は残る。弾力あふれる晩年のピアノ曲『ソテー』や『ロマンティックな挽肉』は、序曲の(鍋で食材が香ばしくはじけるような)勢いに通じる。しかるべき手順で料理を整えることは、音楽を練り上げることに通じるのだろう。

ロッシーニ (1792-1868)

## 歌劇『アルジェのイタリア女』序曲

肉屋の下宿から通ったボローニャの音楽学校では、教科書的な学習を嫌い、モーツァルトやハイドンを熱心に学んだ。1810年、この問題児に最初の道を開いたのが、ヴェネツィアからの依頼である。当地に建つ3つの劇場に1幕ものの作品を提供しつつ、やがてセリア『タンクレーディ』(1813年)が大当たりをとる。本作はその3か月後、海に浮かぶこの魅惑的な都市のサン・ベネット劇場で初演されたブッフアである。

トルコで捕らえられた若いイタリア女が、好色で獰猛な太守を騙して恋人と脱出するというあらすじ。この種のストーリーは当時の流行り<sup>はや</sup>で、同じ台本が5年前に別の作曲家によってナポリで上演されていた。モーツァルト『後宮からの誘拐』も似た話である。世紀をまたぐと、こうした「粗暴な東洋人」は悩みを抱えるキャラクターになっていく。シューベルトはそんな繊細な東洋人を、ロッシーニ風の騒擾的なフィナーレを活かしつつオペラ『フィエラブラス』(1823年)で描いた。

弦楽器の室内楽的な序奏(1分半ほど)に、軽やかな主部が続く。円を描くようにクレッシェンドし、らせん階段を駆け上るようなクライマックスを迎える。途中、のどかな管楽器(ここではオーボエ)の第2主題が一息つかせてくれる。それらは、聴く者の意欲(食欲)を煽っては一時的に鎮めるロッシーニの得意技で、本日の3作すべてに共通する。

[作曲年代] 1813年 [初演] 1813年5月22日、ヴェネツィア

[楽器編成] ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット、ホルン2、トランペット2、打楽器(大太鼓、トライアングル、シンバル)、弦楽5部

ロツシーニ (1792-1868)

## 歌劇『チェネントラ』序曲

1815年、「ナポレオンの100日天下」をきっかけにヨーロッパはまたも大混乱に陥り、ロツシーニの拠点ボローニャは宿敵オーストリアの手に落ちる。身の危険を感じた作曲家をナポリに招いてくれたのが、天才興行師D. バルバイアである(ウィーンでの大人気も彼の仕掛けだ)。オペラの伝統を誇るナポリの劇場と歌手層をたくみに活かし、脂の乗りきった作曲家はセリア『オテッロ』(1816年)などによって名声を広め、1822年までこの地を拠点に筆を振るう。

ナポリで成した大きな革新の一つが、登場人物に多彩な色合いを与えることでブッフアのジャンルに深みを与えたことだった。その達成は最後のブッフア『チェネントラ』(1817年、初演はローマ)に顕著である。C.ペロー原作によるシンデレラの童話(17世紀フランス)を翻案したこのオペラでは、『アルジェのイタリア女』のような賑わしさは退き、灰まみれの少女が愛によって成熟してゆくプロセスに光が当たっている。深みを帯びたヒロインの歩みという(モーツァルト・オペラにも通じる)性質は、やがて19世紀オペラをも成長させることになるだろう。

序曲は、3か月前の自作ブッフア『新聞』の転用。変ホ長調という柔らかな調で書かれ、本日のプログラムではひとときわ緩徐的に響く。開始3分半ほど、クラリネットが先導する第2主題が涼しげに鳴る。最後の2分ほどには、意表を突いて再び盛り上がりを見せる。シューベルト『ザ・グレート』のフィナーレでも光る工夫だ。

【作曲年代】1817年 【初演】1817年1月25日、ローマ

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、弦楽5部

ロッシーニ (1792-1868)

## 歌劇『セビリアの理髪師』序曲

ロッシーニの生き方は並はずれて潔かった。『チェネントラ』を最後に25歳でブッフアの筆を折ると、6年間かけて築いたナポリでの地位をあささり捨てて国外に漕ぎ出し、フランス語の大掛かりなグランド・オペラに最後の力を注ぐ。そして後半生をまるまる、優雅な引退生活にあてたのだ。

ブッフアのキャリアがひときわ短かったこともあり、セリアの復権にこそロッシーニ最大の功績はあるとも言えるが、汗まみれの新時代に魅せられたことは疑いない。フランスの鬼才ボーマルシェの『セビリアの理髪師』(1775年初演)は、そんな新時代を象徴する戯曲だった。色あせた貴族を茶化し、これを手玉にする知恵者フィガロの活力を称えた問題作である。

そのイタリア語翻案が人気作曲家パイジェットの音楽で当たりをとると(1782年)、これに触発されたモーツァルトが続編『フィガロの結婚』で一世を風靡(1785年)。この流れにロッシーニ作品がくる(1816年、ローマ初演)。先輩作曲家への配慮から当初はタイトルを『アルマヴィーヴァ』としたにもかかわらず、初演はパイジェット派の妨害で台無しになったが、「現存するブッフアの中でいちばん見事」というヴェルディの賛辞(1898年)が、その先駆性を証している。

わずか13日で仕上げたと言われ、序曲は自作『パルミラのアウレリアーナ』(1813年)から転用された。ヴァイオリンとヴィオラ(ピッコロが加わる版もある)がオクターヴで重なる切ないこのメロディは、ロッシーニの代表作『セビリアの理髪師』序曲として今日よく知られている。

【作曲年代】1816年 【初演】1816年2月20日、ローマ

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦楽5部

シューベルト (1797-1828)

## 交響曲第8番 八長調 D.944 『ザ・グレート』

たった31年。ロッシーニの半分にも及ばないけれど、精神の<sup>オデュッセイ</sup>旅にたえず身を置く人生だった。それが音楽の吐息からひしひしと伝わってくる点に、この作曲家の魅力はある。

フランツ・シューベルト(1797-1828)は、寄宿制学校のオーケストラで腕を磨き、ここを退学する16歳ころから交響曲を書き始める。半ばプライベートな場での上演を想定した初期作品は、1年に1作の割合でのびのび仕上げられた。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの音調が、そこには若々しく反映されている。

やがて大志が沸騰する。ロッシーニの洒落たメロディと渦巻くような盛り上がり模した第6番(1818年)を最後に修行の筆はおかれ、ホ長調(1821年)、ロ短調(第7番『未完成』、1822年)と、ベートーヴェンが交響曲に<sup>選ばなかつた</sup>調で、自分だけの音が探求される。未完に終わったこれらの中期作品はまずもって、得意な「歌曲」を交響曲に移す試みだったといっよ。

そんな抒情世界を超えたところに、まったく新たな地平が拓けた。人生最大の転機となる1824年のこと。3月最後の日、ローマに留学中の親友に宛てた手紙を読もう。「……ひとことで言うと、僕は自分が世界でもっとも不幸でみじめな人間だと感じているのです。……愛と友情の幸福は、いまやこの上ない苦痛でしかないし、美への熱狂は消え去ろうとしています」。おそらく前年に発症した梅毒とその治療による痛み、大作オペラの上演取り消し、そして親友たちの留学による孤独感——こんな厄年はあるものだろうか。

だが重要なのは手紙の後半だ。新たに手がけた「器楽作品」を足がかりに「僕は<sup>大</sup>交響曲(die große Sinfonie)[英語で「ザ・グレート」]への道を開こうとしているのです……」。『ロザムンデ』や『死と乙女』(D.804、810)といったこれらの「器楽作品」は、王室のヴァイオリニスト、I.シュパンツィヒ(1776-1830)が手がけていた公開演奏会プロジェクトを念頭に作られたものだ。これらの室内楽をステップに、堂々たる交響曲をおおぜいの人に届けたい! そんな決意が宣言されたのである。

野望はゆっくり形をなし始める。1825年夏、28歳を迎えたシューベルトは、生涯で最大となるザルツブルク方面への大旅行に友人たちと出かけた。その荷物の

中には、ハ長調で書き始めた草稿の束があっただろう。生まれて初めて見る湖水や山岳の風景に心を揺さぶられつつ、筆は進められた——家族宛の手紙で、ザルツカンマーゲートは「神々しい(göttlich)」とさえ形容されている。

さて、この「大交響曲」の特徴は(上に紹介した『ロザムンデ』や『未完成交響曲』とちがって)自作からの引用が見られない点、つまり公的な威容にある。これを同音型の「反復」が支える。生前に演奏が敬遠される原因にもなったが、まるで雄渾な山岳をじっくり眺め渡すかのような「反復性」こそ、全楽章をつらぬく原理である。楽友協会に献呈された総譜には、最晩年までおよぶ丹念な修正の跡が見られる。

かくして、以前の何にも似ていない音楽、万人に開かれた——普遍的とさえ呼びたくなる——交響曲が生まれた。初演は、死後に作曲家の兄から筆写総譜を継承したR.シューマンの手からF.メンデルスゾーンに託された。それは文字通り、後代を導く音楽となる。

**第1楽章** 主部の開始から3分ほど、トロンボーンの第3主題が遙けき弱音で響く。このインパクトこそ、円熟期シューベルトが到達した形式構想の粋だ。

**第2楽章** 半分をやや過ぎたあたりで逆巻くカオスと、直後の沈黙。このクライマックス構成をシューベルトは好んだ。

**第3楽章** 白眉は真ん中、ホルンが主導する24の同音連打で始まる長大なトリオ。

**第4楽章** ベートーヴェンの「歓喜の歌」をさりりと引用したフィナーレ。

【作曲年代】 1825-1826年 【初演】 1839年3月21日、ライプツィヒ

【楽器編成】 フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ、弦楽 5部

ほりともへい / 1979年生まれ。国立音楽大学・西南学院大学ほか講師。専門は音楽美学。2013年、東京大学大学院・後期博士課程修了。博士学位論文にて日本シェリング協会研究奨励賞を受賞。著書『〈フランツ・シューベルト〉の誕生——喪失と再生のオデュッセイ』（法政大学出版局、2016年）